

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：32621

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2023

課題番号：19K23137

研究課題名（和文）東南アジアムスリム社会におけるソーシャルメディアと排他主義的言説の生成・共有

研究課題名（英文）Narratives of religious exclusivism produced and shared through social medias in Muslim Southeast Asia

研究代表者

久志本 裕子（Kushimoto, Hiroko）

上智大学・総合グローバル学部・准教授

研究者番号：70834349

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は大きく三つに分けることができる。第一に、ソーシャルメディアで流通している排他主義的な言説について、コロナ禍のロヒンギャ難民に対する排他的な言説の分析を行い、イスラームとの結びつきよりむしろSNSという媒体自体の問題性が明らかになった。第二に、排外主義に対抗して位置づけられる「穏健」「寛容」を目指す言説についてインドネシア、マレーシアの事例から考察を行い、それぞれの社会でこれらがやはり政治と結びついて独特な位置づけを与えられていることが明らかになった。第三に、そもそも「穏健」というラベルがオリエンタリズム的な枠組みに基づくことの問題を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、東南アジアの社会におけるイスラームの展開についての理解にとどまらず、より一般的な「異文化を見る」ということの問題性や、差別の構造の理解につながるものであると考える。ソーシャルメディアで排他主義的言説が広まる状況はイスラームに限らず、特にナショナリズムとの結びつきで各地で見られるが、イスラームと関係づけられる場合でも構図としては変わらない。さらに、イスラームの排他主義に対して一見問題がないように見える「穏健」「寛容」の主張にも、それを「外から」見て評価する人々のまなざしと権力関係の問題が見られる。「共生」を構想するにはその関係性を問い、変えていくことが不可欠であろう。

研究成果の概要（英文）：The results of this study can be summarized in three main aspects. First, regarding the exclusionist discourse circulating on social media, an analysis of the exclusive discourse against Rohingya refugees under COVID19 revealed the problematic nature of the SNS medium itself, rather than its connection to Islam. Second, discourses of “moderation” and “tolerance,” which are positioned in opposition to exclusionism, were examined in the cases of Indonesia and Malaysia, and it became clear that these discourses are uniquely positioned in each society in relation to politics. Third, it was pointed out that the label “moderate” is problematic because it is based on Orientalist frameworks.

研究分野：文化人類学、イスラーム地域研究

キーワード：イスラーム 排他主義 寛容 穏健 マレーシア インドネシア ソーシャルメディア オリエンタリズム

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

イスラームの名を冠した暴力行為が世界各地で見られるようになって久しいが、「穏健」なムスリムが多いという印象を持たれがちな東南アジアにおいてもイスラームと結び付けられる排外主義が目立つようになってきている。明確な暴力行為を伴うものだけでなく、より社会的に幅広い層を巻き込んで展開しているのがソーシャルメディアを通じた排外主義的言説である。

そうした排外主義の高まりは、しばしばイスラームに対する関心、意識の高まり、いわゆる「イスラーム復興」「イスラーム化」と呼ばれるような社会の変化と関連付けて理解されてきた。しかしながら、イスラームへの意識が高まることは、必ずしも排外主義へと結びつくのではない。イスラームに結びつけて排外主義的主張がされるのに対し、それを封じ込めるような議論としてイスラームに結びつけて「穏健」「寛容」といった価値が主張されることも多々ある。このように「イスラーム的」言説があるときは排外主義と結びつき、またある時は「穏健」「寛容」といったものと結びつくのはどのような仕組みによるのだろうか。本研究はこの問題について、マレーシアとインドネシアでソーシャルメディアを通じて形成、流通している言説を事例として考えることを目指して計画された。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、グローバル化時代のイスラーム知識伝達の変化、特に他宗教に対する排他主義的主張（およびそれに対抗する寛容性の主張）が生成、普及するメカニズムを、東南アジアの歴史的、社会的文脈の中で説明することであった。マレーシアとインドネシアの合計4地域を主な事例として、両地域で広く普及してきた古典的キターブの言説、各国の宗教教科書や公的な宗教機関のオフィシャルな言説、ソーシャルメディアで人気を集める説教師等の言説、の三つにおいて非ムスリムとの関係がどのように語られているのか、それぞれに人々がどのようにアクセスしているのかを地域の文脈において比較分析し、ソーシャルメディアが排他主義的言説の生成、普及に果たす役割についていくつかのパターンを明らかにすることを目指した。

## 3. 研究の方法

### イスラーム的言説形成の歴史的变化

公的な権威づけのシステムを本来持たないイスラームにおいて、個々のムスリムが「イスラーム」の意味を形成する上で重要なのは、彼/彼女らが誰に宗教的権威を見出すかという認識である。近代的学校教育と印刷、出版からインターネットに至る情報技術の発展はこの宗教的権威の認識の変化の重要な要因となってきた (eg. Starrett, Gregory. 1998. *Putting Islam to Work: Education, Politics and Religious Transformation in Egypt*; 久志本裕子 2014 『変容するイスラームの学びの文化—マレーシア・ムスリム社会と近代学校教育』)。本研究のテーマであるソーシャルメディアにおける言説を理解するためには、まずはこのようなメディアとイスラーム権威の認識の歴史的変容を把握する必要がある。

### ソーシャルメディアにおける言説の分析

特に排他主義的な言説で知られる説教師などに着目してソーシャルメディアでの発信、それに対する人々の反応などを分析するとともに、それらの言説が従来の出版物や学校教育などにおける言説とどのようなつながりを持つのかを明らかにするという手法を取った。

### 「穏健」を目指す言説の分析と、「穏健」をどのように見るか

排外主義的な言説を収集する一方で、イスラームのあるべき姿を moderate (穏健・中庸) といった表現で論じる説教師や政府の公的な言説についてもソーシャルメディア、および書籍や教科書などの多様なメディアを通じて収集した。

## 4. 研究成果

2019年度に研究をはじめ、年度末からコロナ禍の状況にあったため、研究計画を大幅に変更する必要が生じたが、その中で新たな課題を見つけることもできた。まず、排外主義的な言説の分析については、2020年3月ごろからマレーシアでコロナ感染が拡大する中で、移民、特に非正規移民が感染源と認識され排外主義的な言説が SNS で次々

に共有される事態が起きた。中でも、ミャンマー西部にルーツを持ち「難民（マレーシアの立場からは非正規移民）」としてマレーシアで暮らすロヒンギャに対しては、従来のムスリム同士の連帯感を強調した関係性とは打って変わって、ムスリムとみられる投稿者が相次いでロヒンギャを他者化し追い出そうとするような言説が SNS にあふれた。この状況をリアルタイムで追い、上智大学オープンリサーチウィーク 4 研究所共催シンポジウム「コロナ危機下で考えるマイノリティ：アメリカ合衆国、コロンビア、マレーシアの現実から ～移民、難民への差別と不正義～」での報告へとつなげることができた。しかし、この研究を進める中で、このような SNS での投稿の多くがフェイクアカウントからされており、その背景には何者かが組織的に人々を動かしている可能性も見えてきた。その場合、メディアの発達に伴うムスリム社会の変化、あるいはムスリムの考え方の変化、といった文脈でこの問題を見るよりも、互いを貶めようとするグループ間の政治の問題として見たほうがよいことになり、そこには様々な危険も伴う。

以上のことから、排外主義的言説に直接アプローチするよりも、そうした排外主義の台頭を念頭にそれに対抗する流れとして打ち出されている「穏健」「寛容」を主張する人々に着目し、これらについてもまた歴史的なイスラーム言説の変容と、社会的文脈の中において分析することを試みた。インドネシアでは 2020 年前後から宗教省が中心になって宗教間の共存や、民間信仰的な実践などある宗教の教義に反するような実践に対する寛容さを可能とする「穏健」な宗教の在り方を目指す「宗教の穏健化モダラシ・ブルアガマ (moderasi beragama)」というスローガンを進めている。これに関する文献を読解する中で、インドネシアにおける穏健の言説がナショナリズムと独特な結びつき方を示すことが明らかになった。一方、マレーシアでは類似する政府の取り組みとして 2000 年代のアブドゥッラー政権下の「イスラーム・ハドハリ」、2010 年代ナジブ政権下の「ワサティヤ」といったスローガンが掲げられてきたが、いずれも政権交代と共に使われなくなり、様々な形で揶揄されるようなキーワードになっている。このことはマレーシアで「穏健」であることが求められていないということではなく、マレーシアの政府も人々も大多数は「マレーシアのイスラームは穏健である」ということを誇るのがあるが、「穏健」をキーワードとして示す政府や、宗教間対話や人権意識の向上などを目指す人々が使う「穏健」というキーワードは、ともするとイスラームを西洋的な「リベラル」へと導く危険な言説であるとみなされ批判されるという複雑な構図が見られる。以上の考察については、口頭発表「過激」な穏健？ マレーシアにおける「穏健」派の微妙な位置」（2023 年 3 月 29 日）として報告した。

「穏健」「寛容」の言説に着目して研究を進めていく中で新たに増えてきた課題は、何をもって「穏健」というのか、それを「外から」研究者や学生たちが見ること、語ることは何を意味しているのかについて考えなくてはならないということであった。「穏健」は現状でイスラームの名を冠した排他主義や過激主義に対して「正しいイスラーム」を語る際に用いられる語でもあり、インドネシア政府やマレーシア政府といった政府や、諸外国から見て「望ましい」勢力に対して味方としてのお墨付きを与える語でもありうる。その際に働いているのは、欧米や日本などで「一般的」とされている価値観を共有できる、共有していることを積極的に主張しているかどうか、という「文明」への近さを測る発想、つまりオリエンタリズム的な「文明／野蛮」の二分法の発想であり、イスラームをあくまで「未開」の側に置いたうえで、その中でもより「文明」に近いと評価できる人々や考え方を「穏健」として評価しているだけなのではないだろうか。インドネシアやマレーシアのイスラームは日本で一般的なイメージの中では「穏健」と語られることが多く、それは「中東は過激・危険」といった対抗イメージとセットになっている。イスラームについての理解を促す書籍や授業実践などでも、しばしばこのような「穏健」なムスリムの例を挙げることで、「イスラームは危ないと思っていたけれども穏健な人々もいて必ずしも怖くないことがわかった」という結論に導くようなものが多々ある。しかしながら、このような結論は先の「文明／野蛮」の枠組みとあくまで「見る側」が文明の基準を保持するという発想の中でイスラームを見ることに修正を迫るばかりか、その構図を強化するような働きをもつのではないだろうか。研究課題の後半ではこのような問題意識を明確にし、東南アジアのイスラームについて全体像的なイメージを一般の人々に共有する書籍『東南アジアのイスラームを知るための 6 5 章』（2023）を出版した。また、東南アジアのイスラームについて学ぶ授業で「穏健」だという理解にとどまるのではなく、そのようにみている「われわれ」の見方自体を問い直すような大学での授業の可能性を考え、論文「東南アジアのイスラームを通じて偏見・差別の構造を考える 「穏健」で終わらないための概念型の講義設計」（2024）を発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 久志本裕子	4. 巻 87巻4号
2. 論文標題 「障害をめぐるイスラームの言説と共生の文化への可能性 マレーシアにおけるイスラーム解釈の狭小化の問題から」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『文化人類学』	6. 最初と最後の頁 674-684
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 3件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 久志本裕子
2. 発表標題 「「過激」な穏健？ マレーシアにおける「穏健」派の微妙な位置」
3. 学会等名 科研基盤A「穏健イスラーム」2022年度第4回研究会（2023年3月29日ZOOM）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 久志本裕子
2. 発表標題 マレーシアのイスラーム 『穏健』と『厳格』を考える
3. 学会等名 笹川平和財団アジアのイスラーム勉強会第5回
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 久志本裕子
2. 発表標題 「コロナ禍のマレーシアSNSにおけるロヒンギャ難民批判の『炎上』」
3. 学会等名 上智大学オープンリサーチウィーク4 研究所共催シンポジウム「コロナ危機下で考えるマイノリティ、移民難民への差別と不正義：アメリカ合衆国、コロンビア、マレーシアの現実から」2020年11月19日 上智大学（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 久志本裕子
2. 発表標題 「東南アジアにルーツを持つ在日/日本人ムスリムにとっての信仰実践と日本社会」
3. 学会等名 公開シンポジウム「ディアスポラのムスリムたち 異郷に生きて交わること」
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 久志本裕子・野中葉（編著）足立真理、新井和広、阿良田麻理子、有川友子、市岡卓、大川玲子、太田淳、岡本正明、小川忠、小河久志、鴨川明子、茅根由佳、川島緑、上原健太郎、倉沢愛子、黒田景子、斎藤紋子、佐々木拓雄、塩崎悠輝、菅原由美、多和田裕司、坪井祐司、床呂郁哉、中田有紀、西直美、ハズマン・バハロム、服部美奈 以下略	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 404
3. 書名 東南アジアのイスラームを知るための64章	

1. 著者名 イスラーム文化事典編集委員会（委員長 八木久美子、編集幹事 阿部尚史、久志本裕子、澤井充生、澤江史子、山根聡、編集委員 鎌田由美子、刈谷康太、後藤絵美、島田志津夫、深見奈緒子）編、愛甲恵子、相島葉月、青柳かおる、青山亨、赤堀雅幸、秋葉淳、浅田郁、安達智史、アビール・アル＝サマリ、阿部克彦、安倍雅史、阿部るり 以下略	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 748
3. 書名 イスラーム文化事典	

1. 著者名 SAWAE Fumiko (ed.)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Center for Islamic Area Studies, Sophia University	5. 総ページ数 168
3. 書名 Muslims in Globalizing World: Some Reflections on Japan, SIAS Working Paper Series 38	

1. 著者名 澤江史子（編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 上智大学イスラーム地域研究センター	5. 総ページ数 160
3. 書名 グローバルな認識論的権力作用の中のイスラームと日本 SIAS Working Paper Series 37	

1. 著者名 赤堀雅幸（編）小牧幸代、高橋圭、久志本裕子、新井和宏	4. 発行年 2021年
2. 出版社 上智大学イスラーム研究センター	5. 総ページ数 90
3. 書名 ディアスポラのムスリムたち：異郷に生きて交わること（担当章 東南アジアにルーツを持つ在日／日本人ムスリムにとっての信仰、実践と日本社会）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------